

八林秀一先生のおもいで

栢田大知彦*

八林秀一先生は、筆者が尊敬する、ドイツを対象とする経済史・労働史研究者の大先輩である。直接講義を受けた経験はないが、研究領域および対象とする時期に重なる部分があることもあり、大学院生の頃からさまざまなかたちで研究をすすめていくうえでのアドバイスを数多くいただいていた。はじめてお目にかかって以来、拙稿の抜刷を毎回贈らせていただいたが、先生はご多忙にもかかわらず、いつも丁寧なお便りと貴重なコメントをお寄せくださった。今回、先生からのお便りをあらためて読み返し、感謝の念を禁じえないことは勿論、先生のやさしさ、スケールの大きさを思い出さずにはいられない。

昨年10月、先生の担当されていた授業を一時的に筆者が担当することになった。先生から受けた大いなる学恩に少しでも報いる機会を与えていただいたとの思いがあふれたことを覚えている。後日、この件を知った先生が喜んでくださったという話をうかがい、ただただ有難く思った。ただし、卒業を控えていた先生のゼミ生の諸君は、研究の方法や論文の書き方等についてはもとより、詳細な参考文献の紹介に至るまで、きめ細かな指導をすでに十分に受けており、筆者はただ若干の助言を提示するのみであった。先生のご指導を受けた数多くの先輩たち同様、彼ら3名もまた、かたちはそれぞれではあるが、先生の学恩をむねに社会へと旅立っていった。

八林秀一先生は、19世紀以降のドイツの手工業（者）およびその団体を中心的な研究対象として数多くの業績を残され、学会および研究史に多大な貢献をなされた。非常に高度な水準にあり、かつ幾重にも積み上げられた手工業についてのご研究の軌跡およびその意義を短くまとめることは、筆者の手に余る。先生の幅広い業績の中で、筆者にとって最も印象が強く、筆者を含め多く研究者に参照され、また引用された論考の一つは、第一次世界大戦後のドイツにおける経済のあり方およびその評価をめぐる、いわゆる「ボルヒャルト論争」を紹介し、かつ詳細に検討した「ワイマール期ドイツ経済体制・経済政策史をめぐって：『ボルヒャルト論争』覚書」（『土地制度史学』第142号、57-64頁、1994年1月）である。ドイツの労働史、とりわけ両世界大戦期を中心的な対象としてきた筆者にとって、自身の研究を一步でも前にすすめるうえで、まずふまえなければならない論考であった。幾度も読み返し書き込みを重ねたため、すっかりいたんだ本論考のコピーを手にとると、先生からもっと多くのことをお教えいただきたかった、いろいろなことを直接お聞きしておけばよかった、こうした思いが募ってくる。先生を思い出すとき、後述するはじめてお会いしたときの状況から、まずやさしい、あたたかいという印象が心の中にひろがる。ただし、いつもあたたかかった先生のお言葉のなかには、鋭い指摘が多く含まれていた。このことが記憶に鮮明に残っている。先生との討論を通じて自分の研究の問題点があぶりだされることを無意識のうちに恐れていた

* 専修大学経済学部兼任講師

のではないかと、いまになって思う。いずれにしても、先生のあたたかさに触れていたかったという甘えが筆者にあったことは否定できない。

勿論先生は、筆者の「青くさい」議論を真摯に受けとめてもくださった。ドイツの労使関係の歴史における転換点を第一次世界大戦中にみるべきか否か。こうした点を盛んに議論したことを記憶している。討論においては、熱くなる筆者の話をまずしっかりと聞いてくださり、最後にはよく「見方や意見はそれぞれ違ってよい」ということを強調されていた。先生から学んだこのような姿勢は、筆者の歴史に対する態度、向き合いかたの土台となっていることは疑いない。

八林先生が、斎藤哲先生、鎗田英三先生と共に編著された『20世紀ドイツの光と影：歴史から見た経済と社会』（芦書房、2005年）も頻繁に使わせていただいている書である。わかりやすく、また対象を幅広くとったその豊富な内容から、はじめてドイツのことを学ぶ学生にまず勧めている書であり、立教大学経済学部における授業でテキストとして用いたこともある。現在本書は、日本で20世紀のドイツ史を学ぶ際、最初に読まれるべき書として「定番」の位置を占めるに至っていると思われる。

筆者は、先生からの学恩の多くを、主に経済史を中心にドイツを対象とする研究者が集う「ドイツ資本主義研究会（第二次）（ADWG（NF））」という場を通じて賜ってきた。以下では本研究会でのことを中心に、先生のおもいでを綴らせていただければと思う。

筆者が入学した大学院経済学研究科では、当時8つもの歴史関係のゼミが開講されていた。駆け出しの身であった筆者は、博士前期課程の頃はそれらの幾つかを履修するだけで精一杯であり、学会等において盛んに活動する大学院生とは必ずしもいえなかった。1996年1月、ワイマール期ドイツにおける労使関係に関する修士論文をどうにか書き上げ、同年5月、その一部をまとめる形で自身の研究をはじめて学外で報告する機会を得た。「ドイツ資本主義研究会（第二次）」の第37回例会（於：専修大学神田校舎）がその舞台であった。原因は緊張なのか、その乏しい内容なのか。いずれにしても大変稚拙な報告であったことは疑いない。本研究会の例会では、1時間ほどの報告の後に、同じく1時間もの討論の時間が用意されている。この筆者の報告に対しては、ほぼすべての時間、ほとんどがはじめてお会いしたばかりのドイツ（経済）史を専門とする先生方によって、さまざまな角度から厳しい批判が投げかけられた。結果として筆者は研究テーマの修正を行うことになるのだが、本報告と討論を通じてそれほど大きな衝撃を受けたということである。このような状況であった例会と懇親会との間の短い時間、うちひしがれていた筆者にやさしい言葉をかけてくれた方がおられた。八林先生であった。これが先生との初めての出会いであった。おはなしいただいた内容は差し控えるが、あの日の先生の笑顔がいまでも思い出される。勿論ご労作等を通じてお名前は存じ上げていた。このとき筆者は、大変恐縮すると同時に、研究者としていま一度立ち上がり、やっていこうという勇気をいただいたと（いまでも）勝手に思っている。

拙著が出版されたときも、すぐに本研究会における合評会（評者は田中洋子先生）で取り上げてくださり、司会の労をおとりいただいた。さらにその席で、拙著が社会政策学会学会賞（奨励賞）を受賞したことを参加者の前でおはなしいただくというお心遣いまで賜った。

先生は、筆者が「ドイツ資本主義研究会（第二次）」の会員となった後の例会にはほとんど参加されており、筆者の知る限りほぼすべての報告に対し発言をなされてきた。筆者を含む後に続く者、とりわけ若い研究者、大学院生の多くは、先生から具体的かつ貴重なアドバイスと同時に、研究を

続けていくうえでのヒントを多く得たに違いない。例会に参加する人数が少ない時期もあったこの研究会を、近年まで一貫して牽引し続けたのは、疑いなく八林先生であった。

また例会の後、恒例となっていた懇親会の席では、いつも多くの者にまんべんなくお声をかけられていた先生の姿が思い出される。若手にお付き合いいただき、（なかばあきれながらも）懇親会の二次会に参加され、そこでご馳走していただくこともしばしばであった。まさに若手の「兄貴分」的存在であった。いつかの懇親会において、学生運動が話題となったことがあった。その際、先生は「私は別の運動〔サッカー〕に（も）夢中だった」というお話をなされ、場が大いに和んだことも忘れがたい。こうしたさまざまな場面で垣間見られた、先生の「広さ」「しなやかさ」を羨ましく思っていたのは筆者だけではないだろう。

本学経済学部で齊藤佳史先生のご厚意により、八林先生の研究室から御蔵書をお分けいただけるという、またとない機会をえることができた。昨年末、はじめてお邪魔させていただいた先生の研究室からは、長きにわたりひとすじに打ち込んでこられた研究者の重厚な「歴史」が感じられた。膨大な御蔵書に囲まれ、論文執筆に取り組まれる先生の姿が浮んでくるかのような雰囲気、そこにはあった。上記のように先生とは研究対象が重なるということもあり、筆者がすでに所有している書も数多く存在した。だが、分けていただく書を選ばせていただく過程で、当然ともいえるが、それらの多くに先生の手による書き込みがあることにきづく。長文にわたるものもあれば、邦訳書の訳語を逐一適切なものに訂正されているケースもある。興味深い無数の書き込みを読むことに没頭してしまい、梱包を行う時間がなくなってしまう日もあった。結果として足繁く先生の研究室に通わせていただく中で、筆者は「方針」を転換した。この空間を可能な限り、そのまま保存、いやせめて切り取ることはできないだろうか、それこそが後に続く者の役割なのではないか、と考えるようになった。「別の運動」に関するものも含め、御蔵書はあまりにも多い。だが、とにかく時間の許す限り、ドイツ史関係の書から始め、この空間をそのまま移動させる、受け継ぐ作業に専念することにした。そして現在、先生の御蔵書は—ごく一部ではあるが—、法政大学大原社会問題研究所の筆者の研究室に並んでいる。身の引きしめる思いである。当然ではあるが、このことのみをもって、先生の学問を継承できるわけではない。ただ、御蔵書の一部を紐解くたびに、それらを駆使することを通じて、少しでも先生の域に近づければとの思いがあふれるのである。また、こうした目の前にひろがるさらなる先生からの学恩を、さらに後に続く者に伝えていく。今後もこのための努力を惜しまない所存である。

八林秀一先生との出会いに感謝しつつ、ご冥福をこころよりお祈り申し上げます。